
Eternal

緑士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

E t e r n a l

【Nコード】

N 5 4 6 1 G

【作者名】

緑士

【あらすじ】

ラグナロク、それは神々の戦いのはずだった。でもただの遊びになっていた。青年たちは生と死の境をさまようことになってしまった。

プロローグ

人は無力、たった一人では何も出来ない脆弱な生き物。

みんな半人前なんだ、だから家族がいる、だから友達がいる、だから恋人がいる。

みんなが集めれば幸せになれる。そんなの幻想だ。

人の幸せは人の不幸の上に成り立っている。勝者がいれば敗者がいる、富豪がいれば貧民がいる。

命なんて儚い、だからこそ美しい。一瞬の命こそ、この世で最高の美だ。だが、醜くもしくつく生に縋りつく命は最も醜い。

人は一人では生きていけない。もし、何も無い絶海の孤島に捨てられたら生きていくことは困難を極めるだろう。

人は死に直面したとき何を考えるのだろう。恐怖？ 幸福？ そんなのは人それぞれだ。

死に恐怖する者は生に縋るもの。死を幸福だと思うのなら、それは生から逃れようとする愚者。

人は常に何かを求めている。それが何なのかは全く分からない。でもそれは、日常ではない、変化。

人は一秒一秒変わる。

日常は――無い、あるのは変化のみ。

The first day 〱親父の家出?!〱

の
早朝、けたたましく鳴る目覚し時計を床に叩きつけて、俺、東野
雄二は目を
覚ました。

「……ん」

目覚し時計の音よりも、叩きつけた方の音が大きかったので、それでいつも目を覚ましている。

叩きつけられた目覚し時計は完全に止まっていた。

（壊れたか？）

俺はそう思って、ベッドから出て確認しに行くと、ただ単に電池が抜けていただけだった。

よかった。俺は着替えて、いつも通り学校に行く準備をしていく。カバンに教科書類を詰め込み、昼食の弁当を作るために階段を下りていく。

いや、落ちた。ん？ これも違うな、落とされたんだ。

「おはよう！ 我が息子よ！」

階段の上で仁王立ちする親父、東野 雄一が下まで落ちた俺を見下している。

「……」

「あ……ごめ、グフツ、ちょっ、ぎゃあああああああああ
！！！！」

俺は親父に向かい、鳩尾みぞおちに飛び膝蹴りを入れる、そしてすぐさま
関節技をかけながら顔面を連打。

親父の口からは血が所々出ていたが、この光景は日常茶飯事、い
つも通りの光景なので俺は全く気にしない。

俺は、親父を喋れなくするまで殴り、いつも通り昼食の弁当と朝
食を作る。

「いやあ、さすが我が息子。なかなかのパンチだったぞ♪」

「一生言葉を発することが出来ない身体にしてやろうか？」

俺は持っていた包丁を親父の首に当てる。

「ちょ、喋れなくなるとかそのレベルじゃないから！ 生きるか死
ぬかだからな！？」

当たり前だ、俺だってそんなことは分かっている。

「大丈夫だ、あんたはいくら殺しても死なないからな」

「いや、俺でも流石に限度はあるぞ？」

めんどくさい、親父と話をしても時間の無駄だ。

俺はとりあえず親父を無視して朝食を取る。イスに座り、メーカーで落としたコーヒーを啜^{すす}る。

苦いが美味い。親父は苦いものが嫌いなのでコーヒーは飲まない。他には、ニンジンやピーマン、セロリなど嫌いなものがガキっぽい。

それに対して好きなものは、イチゴミルクなどの甘いものだ。

俺は基本的に甘いものが苦手なので親父と食生活が全く反対だといってもいい。

親父は和食を好んで食べるが、俺は洋食のほうが好きだ。

「うーん、コーヒーはなあ香りはいいんだけどあの苦味がどうしてもダメだな」

親父が俺の向かいに座り、砂糖をたっぷり入れたミルクティーを飲みながら米を食っている。

ミルク系のものと米を一緒に食すと気持ち悪くならないか？

「ごちそうさま。じゃ、俺は学校に行ってくるから」

俺はそれだけ言うと、リビングを出て玄関に向かった。

「おう、気をつけろよ」

親父が声を掛けてくるがとりあえず無視しておく。

玄関を出て真っ先に会ったのが、隣に住んでいる北野^{きたの} 明日香^{あすか}だった。

今の俺の気持ちを一言で表すとしたらを『最悪』だ。

「あ、雄二じゃん。一緒に学校行くよ」

なぜ、質問じゃないんだ？ ふつう「一緒に学校行く？」とか「学校行こうよ」とかじゃないのか？

これが俺が明日香を嫌う理由の一つだ。なんにもかも自分の有利な状況を作ることが出来る。正確にはその空気に流されるとそういう状況が生まれるだけだな。

「はあ……」

「溜め息なんてつかないの！ 人生前向きに生きなきゃね」

俺はお前のせいで後ろ向きになってんだよ！ と、声に出すと本当の地獄より恐ろしい事になってしまうので言わない。

ちなみに近所との上下関係は

明日香↓俺↓明日香の母、名前は、北野^{きたの} 咲紀^{さき}↓その他のご近所さん↓俺の親父、という順番になっている。

息子より地位が低い親父ってなんかやだな。地位が高くて嫌いだけど。

「お？　ねえねえ、雄二、あれ殴ってきていい？」

明日香が指差す先には、俺と明日香のクラスメイトで親友の西村にしむら拓磨たくまがいた。

「いいぞ」

俺が即答することが分かっていたらしく、明日香はもう走り出していた。

「バカ拓磨あ！　金返せえ！」

「うごっ！」

ご愁傷様。

明日香の身長が低い（一四五センチ程度に対し、拓磨の身長は一八〇センチ位ある）ので、頭を狙ったつもりが届かずに後頭部に直撃したのだろう。

見ているだけで痛いんだが……。それになんか拓磨の頭から湯気が出ているように見えるのは気のせいかな？　うん、気のせいだろう。

「ふう、すっきりした〜♪」

傍から見れば危ない人だな。

「……痛いわぁ！ このボ、ごふぁっ！」

言い返してきた拓磨の鳩尾を明日香が突く。

キレイに入ったな。普通の人間なら気絶してんじゃねえの？

「さて、行くよ。遅刻しちゃうからね」

恐ろしいやつ、人殴っても罪悪感が無いのかよ？ まあ俺も拓磨が相手だったらなら罪悪感を感じないけどな。

拓磨をその場に放置して俺たちは学校に向かう。

結局行ってもサボって終わり、授業をまともに受けたためしがない。

でも、学年で上から十位以内の成績だ、誰も文句を言うまい。

さっさと行くか、遅刻したら話にならん。

*

*

*

そして学校

*

*

*

いつも通り俺は屋上にきていた。

そして、いつもと違うのは俺の目の前に親父がいるということだ。

「学校なんて何年ぶりだあ？ 雄二？ アノーユウジクン？」

「オラァ！」

「ぐふっ！ 何をするんだ痛いッ、うわぁ！ ごめんなさいごめんなさい！」

俺は親父が嫌いだ。見ていると何だか殴りたくなる。

「なんでこんなとこにいんだよ？」

「アノー、ちゃんと話すんで首締めるのやめてもらえませんか？」

「断る」

俺がそれだけ言うと親父は諦めてしまい、喋らなくなった。

しょうがないので手を離すと親父はすぐさま一定の距離を取った。

そんなに俺が怖いか？

「ふう、来た理由はな……なんとなくだ。……ちょッ、すみません、真面目に話します。だからにじり寄ってくるのやめてください！」

とりあえず俺は親父を硬いコンクリートの上に正座させた。

「えー、今日学校にきたのは理事長に呼び出されて……、なん

でも大事な用があるというので……」

アノ理事長にか……、もう会うことが無いかも知れないな。

理事長はいわゆる『マッドサイエンティスト』だ。

ちなみに俺も明日香も、この学校のやつはたいてい被害を受けたことがある。

俺は、『どこまで目を回しても耐えられるか』という実験で腕と足を縛られて回転台に固定されて、数時間回転させられ続けたことがある。

本当に地獄だったあのときは。

「南無阿弥陀仏」

「ひどいっ！ 心配してくれないのか!？」

「うん」

即答した。

別に心配する必要が無いからな。

「まあいいや、で、内容が『しばらく家に帰るな、あと三年ぐらい旅に出ろ』だってさ」

「意味わかんねえ」

「簡単に言えば、今日から雄二は一人暮らしだ！ いや、咲紀さんも一緒だし博史^{ひろし}さんたちも一緒だからな、拓磨くんは平気だろうが……明日香ちゃんは無理だな。」

意味はわかった、だけど急すぎやしないか？

ちなみに明日香に料理させると、『絵に描いたような地獄絵図』が待っているため、大変なことになる。

「そこで、だ、お前は明日香ちゃんと二人暮らしな」

は？ それは俺に対して死ねといっているのか？

「もちろん今回は雄二に拒否権は無いぞ？ 理事長命令だからな」

ぐうの音も出ない、アノ理事長に目をつけられたら、それこそ俺の人生が終わっちまう。

「それと、理事長曰く『あの子は面白そう』だそうだ」

しゅくりよく、俺の人生終わった……。

明日香と同居に理事長に目をつけられた。本当に終わったな。

チャイムが鳴り、昼休みの開始の合図がかかった。

「さっさと帰れ、他のやつらが来ると面倒だ」

それだけいうと親父はさっさと帰ってしまった。

そして、家に帰ったときには誰もいなくてテーブルの上には置手紙があった。

『旅に出てきます、身体に気をつけろよ!』

俺は夢でなかったことに絶望した。

The first day 〽親父の家出?! 〽(後書き)

これからは、毎月第2土曜日と第4土曜日に更新したいと思います。

見てくれてありがとうございました。

The second day 〱四神ってなに？〱

ぶっちゃけ、死にたいんだが……。

「雄二〱、わたしのベッドどこ？」

俺の家を寝巻きでうろちろしている明日香、その発言おかしくな
いか？ それと、はっきり言って明日の朝が怖い。

「……お前は居候だ、そしてここは俺の家だ、普通ベッドは俺が使
うんじゃないか？」

「あゝ、うん、そうだよね」

驚いた、てっきり「いいじゃん、べつに」とか「雄二はベッドで寝
る必要が無い」とかいわれると思っていたのに。

まあ、それはそれでいい、自分の居場所が取られないのは安心し
た。

「でも使う」

安心した俺がバカでした。

意味分からん、大体俺のベッドで寝るつもりか？ それだけは勘弁
して欲しい。

嗚呼、俺はなんて不幸なんだ。

ちなみに現在時刻は、午前三時、健全な高校生がここまで起きているのはおかしいと思わないか？

はつきりいつてスゲー眠い。

「じゃ、わたし寝るから」

そう言って明日香は俺の部屋がある二階へと足を運んでいった。

やっぱり俺の部屋で寝るのか……。

俺は……しょうがない、ソファで寝るしかないな。

ったく、俺のうちだつーのになんで俺がこんな立場になってんだよ……？

ああ、だめだもう終わった。

今の状態、明日香が朝食を作っている、現在時刻、午前十時、金曜日。これから導き出される答えは？

完全に遅刻！　あと、明日香の料理を食わされる！　以上！

はつきり言ってキッチンから得体も知れない匂いが漂ってくる。焦げ臭いような硫黄の匂いみたいな、簡単に言えば『気持ち悪くなる匂い』だな。

やばっ……吐き気が……。

「雄二、逃げないでね」

キッチンから明日香の声が聞こえた。

逃げないでね、って、だったら逃げられるようなモンつくるんじゃないやねえよ！

それから数分後

「灰^{はい}」

うーん、今「はい」が灰に聞こえたのは俺だけかな？

だって見た目が『灰』だし、食えるようなモンじゃない。でも食わないと自分の身が危ないしなく、いや、よく考えたらどちらにしろ俺の身が危険じゃん！

「残したら罰するよ」

腹を括^くるしかないな……、とりあえず水の用意をしとくか。

「水で流し込んでもダメだよ、ちゃんと味わってね」

鬼か己は!?

この粉末状のものを飲み物無しで食ったら、口の中の水分みんな持
ってかれるだろうが!

しょうがない、逝くか。

「うわ、本当に食べたよ」

「ふおっひふあひよ!?!」

「ううん、食べなかったら……」

沈黙が怖い、ていうか、よく俺の言葉がわかったな……。

案の定、灰では腹が膨れないし明日香も飯を食ってない。

結論は? 自分のためにも飯を作る。

えーと……? あるものは、

パスタ、バター、しょうゆ、卵などなど。

しょうがない、手軽に作れるもの食うか。

※ここからは本当のレシピです、見たくない方は飛ばしてください※

まずパスタをゆでる、それからフライパンにバターを塗り、ゆであがったパスタをバターで炒める。

炒めている途中、しょうゆを入れて味付けを、バターが無塩の場合は少し多め、塩が入ってるときは少なめで味を調節する。

そして皿に盛り、上に海苔かなんかを乗せて、

完成！

「できたぞ」

「で、なんで自分の分しか作ってないの？」

「お前に食わせる義理は無い」

人の家に居候しながらもベッドや風呂など提供してやってるんだ、文句を言わないで欲しいな。

「出かけてくる」

……おかしいだろ、せめて学校行けよ、今日平日だし。

と、願いは虚しく、明日香は私服で出ていった。

まあいいさ、俺もゆっくり出来る。

今ごろ登校しても無駄だしな。

といっても暇だ、やること無い。

勉強、といってもそれじゃ学校と何ら変わりはない。

運動、身体動かすのダルイな。

えゝ、残っているものといったら、

「寝るか……」

俺はソファーに横になり目を瞑った。

眠くなってきたな……。

「ん……」

時計を見ると正午だった。

結局二時間程度しか寝なかったな。

「たっだいまゝ」

運が良かった、いや、まじで。

明日香に寝ているところ見られたら……想像しただけでも恐ろしい！

「おじゃまします」

聞きなれた声だな、て言うか勝手に人家に連れ込むんじゃないよ！

入ってきたのは、西村 拓磨、俺のクラスメイトだな。

お前も学校行ってなかったのか？

「雄二、飯作ってくれ」

人様の家でなに言ってんだ、このバカは。

「おかしいだろ、何で俺がお前の分まで作らなきゃならんだ」

「雄二は俺の下僕だろ？」

いつそのこと殺っちまうか……。

「潔く首切られんのと、生き埋めにされるのか、首だけ出して錆びたノコギリで首切られるのと、ドレがいい？ 死にかたぐらい選ばせてやるよ」

「じゃあ、殺さないでくれ」

笑顔で言われた。

すっぱームカツク。

「明日香、殺っちまえ」

と言うと、明日香はなぜかメリケンサックを装備していた。準備万端だな。

明らかに殴っている音が聞こえる。

「あまり血で汚さないでく……」

時すでに遅し、白いカーペットが赤く染まっていました。

「なに〜？」

もう答える気にもなれん。

明日香はテーブルに立ちながら拓磨の襟元を掴んでいる。

「い……良い情報教えるから許してください、お願いします」

まあ、これ以上カーペットが汚れると洗うのめんどくさいからな……、

「明日香、放してやってくれ」

明日香が手を放すと、拓磨はため息をついた。

いい情報といっても、ろくなものではないだろう、明日香に放せと言ったのは余計な時間を使わないためだ。

さて、その「くだらない情報」を聞いてみるかな、

「えー、先に言っておく、俺は悪くないからな！」

……いい情報じゃなくて悪い情報の間違いだろ？

暇つぶし程度にはなるのでとりあえず聴いておく、

「雄二と明日香、あと、南^{みなみ}圭斗^{けいと}、そして俺、この四人がなんか四神って呼ばれてるらしい」

四神って……俺らは神様か？

「ちなみに由来は、今ここに居る俺ら三人と、圭斗、この四人がいつもケンカすると勝つかかららしい、別名、守護神だ」

神様には変わりねえのな。

「ちなみに、明日休むなって連絡あった」

まあ、そんな毎日休んでるわけじゃないからな。

明日はちゃんと行けるだろう、今日行けなかったのも明日香が原因だし。

「理事長からな」

……やっぱり休もうかな？

「俺もだ、ていうかさっき名前挙げた四人全員だ。四神って呼ばれてることについてだそうだ」

誰だ！ 俺たちの事をそう呼んだやつは！ 見つけ出してぼこぼこにしてやる！

行かないとどうなるんだろう……？

The third day 憑かれた (前書き)

今回は短くなってしまいました。
すみません。。。

The third day 憑かれた

え、俺たちは今、理事長室の前にいる。

重苦しい扉を開けるのにはそれなりの覚悟が必要だ。

「早く開けろよ」 「早く開けてよ」 「さっさと開けろ」

後ろから拓磨、明日香、圭斗の三人が背中を押してくる。

「……ふざけんな！ 何で俺が先頭なんだよ！」

「「犠牲者に向いてるから」だろ」

……俺ってそんなモンなの？

「……わかったよ」

俺は半ばいじけ半ば怒りで扉に手をかけた。

年季が入ってるためか、扉は軋みながら開いた。

「……先客がいる」

俺は後ろの三人にいった。

先客と言うのは……何て言うのだろう、今では着ない伝統的(?)な衣装で理事長室の椅子に座っていた。

そして奥には理事長が……満面に笑みでこちらを見ていた。

怖いなあ……。

「よく来ましたね、逃げると思っていたんですが……」

確かに逃げようとは思ったさ、でも逃げたらもっと酷いことになりそうだから来たんだよね。

「来なかったらどうするつもりだった？」

「退学処分」

あっさりと言いやがった……。

「何で雄二はそんな気軽に話せるの？」

明日香が後ろに隠れつつ言ってきた。

「俺の従姉妹だから」

今明かされる驚愕の真実！

ってわけでもないんだな。

「……で、俺たちを呼び出した理由は？」

実験とか言ったら逃げてやる。

「ん？ ああ、理由……信じないかも知れないけどいい？」

「出来れば納得できる理由を言ってくれ」

「じゃあ単刀直入に……こちらに座っている方々は神です」

……全世界のときが止まったぞ？

「……分けわかんねえわ！」

後ろにいた三人は欠伸をしていた。

「だから神様なの、ちなみに青い衣を着ているのが青龍、赤い衣が朱雀、白い衣が白虎、玄い衣が玄武ね」

「それが俺たちに関係があるの？」

「ええ、貴方たちには憑かれてもらうわ」

憑かれてもらう？ 神に？ 憑く＝憑依＝身体を盗られる。

「絶対に嫌だ！」

それって死ぬことと一緒にだろ！？

「ごめんなさい、もう憑かれています」

……え？

周りを見ると座っていた奴らが消えていた。

で、俺の後ろにいた。

「はじめまして、蒼あおいです」

ニコニコと笑いながら話し掛けてきた蒼い衣の少女。

「朱月^{あかつき}だ、よろしく」

無表情の赤い衣の男。

「白^{はく}です。よろしくね」

軽々しい白い衣の少年。

「玄王^{げんおう}です、これからよろしくお願いします」

険しい表情の玄い衣の男。

全部俺の後ろにいる……。

「大丈夫ですよ、貴方に憑くのは私だけです。あとの三人はこちらの方々に憑いてますので」

蒼といった少女が落ち着いて言った。

大丈夫じゃねえ！

「ざけんな、今すぐ成仏しろ」

「成仏しろといわれても……幽霊ではないので成仏という概念はありません」

「じゃあ今すぐ離れろ」

「それは出来ませんが、契約をしてしまった為、離れると貴方の魂も持っていくことになります」

え？ 死ぬの？

「他のやつらは？」

「ええ、同じです」

……もういやだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5461g/>

Eternal

2010年10月20日19時36分発行